

2025 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部	准教授	丹下悠史
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 博士課程前期課程 修了	修士（教育 学）	教育方法学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

「真面目」な人間、すなわち「真に信頼して事を任せうる人材」の育成を包括的な目標として、「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」の精神にもとづき、教育活動を通して学生一人ひとりの目標の実現を支援する。

【目標】

教科の指導力や基礎学力の育成、モチベーションの維持向上等、学生のサポートに努め、大学や学部の専門教育を生かしたオンリーワンの教員養成を目指す。

【方針】

学生が納得感・達成感を得ながら、講義等で取り扱う専門的知識のみならず、教員ないし社会人として必要とされる諸資質・能力を高めていけるようにする。

【計画（方法）】

学生一人ひとりが自身の達成度を認識し主体的に学習できるように、課題へのフィードバックや学習内容の外化（議論、発表等）の等、メタ認知の機会を授業の各回に取り入れる。

学生の ICT スキルと計画的な目標遂行能力を向上させるため、Teams 等の ICT ツールを活用し、授業の活性化、時間外学習の実質化を図る。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、道徳教育の指導法（小学校）、倫理学、教育実習事前及び事後の指導（中・高）（9回/15回）、人間健康学（1回/15回）

（後期）

基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、道徳教育の指導法（中学校）、教育方法論（中・高）、教育方法論（幼・小）、教職概論（中・高）、教職実践演習（中・高）（7回/15回）

○教育方法の実践

学生が道徳科の指導法をよりよく理解できるようにするために、既存の授業実践の動画から熟達した教師の意図や指導技術を分析した上で、学習指導案を作成し、相互評価し、選出された学生が行った模擬授業を記録・分析・評価する一連のサイクルを実施した。

○作成した教科書・教材

文部科学省による Web サイト「道徳授業アーカイブ」の授業動画に対応した分析ワークシートを作成した。具体的には、動画中の教師の発問、重要な場面の発言の記録、特定の発問のはたらき

の解釈、そしてそれらについて他の学生と意見を共有した成果を書き込むものとなっている。

○自己評価

学生による授業評価アンケートの結果が例年に比べて悪化した。改善のため、授業の序盤で学生のレディネスを把握し授業の内容や難易度を適切なものにするよう努めたい。

II 研究活動

○研究課題

学習対象への自我関与に着目した道德教育の分析・評価手法の開発

○目標・計画

【目標】

小学校および中学校の道德授業における子どもの発言や記述から、その内容の背後に介在する道德的価値観・判断の特質や、授業を通したそれら相互の影響関係を可視化する手法を開発することで、道德授業における自我関与の成立要因を明らかにする。また、開発された手法を応用し、教師がそれを用いることで子どもの学習の過程を詳細に把握し評価することのできる研修方法を構築する。

【計画】

本年度は主として2024年度に収集したデータを分析し、分析手法の改善を行う。
成果は学会発表および論文として公表する。

○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・丹下悠史（2024）「板書」（p.142）「発問分析」（p.160）『教育方法学辞典』学文社
- ・丹下悠史（2024）「第6章 道德の理論及び指導法におけるアクティブ・ラーニング」愛知東邦大学地域創造研究所編『教員養成におけるアクティブ・ラーニングの実践研究』唯学書房,89-104
- ・丹下悠史（2023）「第18章 豊かな学びを保障する教育を目指して」西尾敦史・大勝志津穂・尚爾華編著『人間健康学』唯学書房,200-209

（学術論文）

- ・丹下悠史（2025）「井上治郎の道德教育論における資料・価値・生活経験の関係：青木孝頼との比較を通して」『東邦学誌』54(1), 31-38.
- ・柴田好章・丹下悠史・水野正朗・埜寄志保・花里真吾・坂本将暢（2024）「問題解決学習に特有の思考様式の間項を用いた授業分析による解明：発言の意図・含意の解釈の客観的表現」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』71(1),81-92.
- ・坂本将暢・丹下悠史・柴田好章・埜寄志保・徐曼・向井昌紀・石黒慎二・水野正朗・副島孝・胡田裕教・清水克博・中島淑子・花里真吾・田中真帆・ファウザン アーダン ヌサントラ・久川慶貴・久留島夕紀・小國翔平・王瀟・寺田実智子（2020）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化：オントロジーを利用して」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』66(2),157-172.
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子（2019）「リアクションペーパーから見る学びの実態と思考を促す要因 ——国立工科大学におけるキャリア科目を事例として」『大学教育学会誌』41(1),147-156.

- ・丹下悠史（2018）「道徳教育における読み物資料のモデルとしての機能」『平成 28 年度 大学院生の教科書研究論文助成金論文集』公益財団法人教科書研究センター

（学会発表）

- ・丹下悠史（2025）「小規模大学における教員志望学生の支援：大学で・地域で・他機関と連携して」全国私立大学教職課程協会 第 44 回（2025 年度）研究大会 シンポジウム講演
- ・Tange Y, “Development of an analytical method for moral education in elementary and junior high schools focusing on students' "ego involvement"” The World Association of Lesson Studies International Conference 2023
- ・柴田好章・水野正朗・小倉弘之・林文通・林エミ・土屋花琳・丹下悠史・花里真吾・王瀟・大岩俊之・朱誉・西浦明倫・廉賀・桒寄志保（2023）「問題解決学習における思考の相互関連－中間項を用いた思考様式の顕在化を通して－」日本教育方法学会第 59 回大会
- ・桒寄志保・丹下悠史・水野正朗・ほか（2022）「問題解決学習における解決の見通しの構成に関わる諸要因の関連構造－中間項を用いた子どもの思考過程の再構成を通して－」日本教育方法学会第 58 回大会
- ・柴田好章・坂本將暢・桒寄志保・岩崎公弥子・丹下悠史・田中眞帆・王瀟・鈴木正幸・石原正敬・水野正朗・花里真吾・ファウサ□ン アータ□ン ヌサンタラ・王芳序（2021）「協同的な探究における子と□もの多面的・多角的な思考様式の解明－中間項を用いた潜在的諸要因の関連構造の明示化を通して－」日本教育方法学会第 57 回大会
- ・柴田好章・丹下悠史・田中眞帆・石原正敬・水野正朗・桒寄志保・花里真吾・坂本將暢（2020）「中間項を用いた授業分析による発言の意図・含意・文脈の解明」日本教育方法学会第 56 回大会
- ・坂本將暢・丹下悠史・柴田好章・桒寄志保・水野正朗・向井昌紀・石黒慎二・徐曼（2019）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化－オントロジーを利用して－」日本教育方法学会第 55 回大会
- ・丹下悠史（2019）「道徳教育における子どもの自我関与の分析と評価」中部教育学会第 68 回大会
- ・坂本將暢・丹下悠史・柴田好章・桒寄志保・水野正朗・向井昌紀・石黒慎二・徐曼（2019）「授業における子どもの認識の展開過程の可視化－オントロジーを利用して－」日本教育方法学会第 55 回大会
- ・丹下悠史（2018）「学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成－地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例に」日本教育方法学会第 54 回大会

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・2026 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)（一般）に申請したが、不採択となった。

○所属学会

- ・中部教育学会
- ・日本教育方法学会
- ・日本教育学会

○自己評価

・『東邦学誌』に一報の論文を投稿したものの、前年度の調査結果を報告にまとめることができず課題が残る1年であった。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

学部、委員会、WGといった各領域において与えられた役割を十全に遂行する。
特に本年度新たに着任した学部執行部員として学部運営に貢献できるよう努める。

【計画】

所属学部、委員会、その他WG等の目標に則し、また授業等を通して学生の要望を収集しながら、積極的に大学運営に参加する。

○学内委員等

学部執行部、教職支援センター運営委員会、人間健康学部部会、教務委員会、IR推進委員会

○自己評価

各委員会等において管轄する業務について積極的に参画し、構成員としての役割を十分に果たせたと考える。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

研究成果を研究職や教育職のコミュニティ、市民社会において広く共有する。また、共有の結果得られたフィードバックを研究課題に反映させ、社会的重要性の高い研究課題の設定に努める。

【計画】

所属する国内、国際学会での研究発表を通して、研究成果を共有する。研究会等の参加・運営を通して教師と協同し学校教育の改善に努める。看護職従事者への臨地実習指導者講習等、他業種の人々に対し、研究の知見を生かして貢献する

○学会活動等

- ・全国私立大学教職課程協会 理事
- ・東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会 代表世話人

○地域連携・社会貢献等

- ・愛知県看護研修センター 愛知県臨地実習指導者講習会（特定分野）「教育方法」講師（2020～）
- ・社会科の初志をつらぬく会 東海研究部 事務局長（2021～）
- ・愛知県総合教育センター 高等学校中堅教諭等資質向上研修（後期）「産業教育における評価の在り方」講師（2023～）

○自己評価

東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会をはじめとした学外組織の活動に積極的に参加した。最低限の責務は果たせたと考えている。今後、地区や全国の私立大学教職課程とのつながり

を本学の教職課程運営に活かせるよう努めたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

博士論文を構成する研究に集中的に取り組むことで、研究者としての基礎的な資質・能力の研鑽に努める。

VI 総括

本年度は、学生一人ひとりの学びを大切にしながら、主体的に学べる授業づくりに取り組んだ。研究では実践と理論の往還を意識し、道徳教育の分析手法の開発を進めた。学内外の組織に委員や講師としても積極的に関わり、多くの人々との協働を通じて視野を広げることができた。今後も教育・研究・社会貢献のバランスを保ちつつ、自らの役割を果たしたい。

以 上